幻妖の文学 上田秋成

森山重雄

森山重雄（もりやま　しげお）

一九一四年　十二月新潟県に生まれる。
現　在　東京大学文学部国文科卒
　　東京都立大学名誉教授
著　書　『封建庶民文学の研究』三一書房
　　『中世と近世の原像』新読書社
　　『西鶴の世界』（現代新書）講談社
　　『近世文学の淵源』桜楓社
　　『上田秋成初期浮世草子評釈』国書刊行会
　　『西鶴の研究』新読書社
　　『近松の天皇劇』三一書房
　　他に近代文学関係、四冊
現住所　東京都練馬区氷川台二―二〇―一七

幻妖の文学　上田秋成

一九八二年二月二十八日　第一版第一刷発行

著　者　森山重雄
発行者　菊地喜三次
©一九八二年
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話　〇三（二九一）三一三一番
振替東京　九―八四一六〇番
郵便番号　一〇一

印刷所　第一印刷株式会社
製本所　東京美術紙工
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

幻妖の文学　上田秋成

目次

幻妖の文学『雨月物語』 5
——言葉との出会い——
一　天皇怨霊の憤怒と言葉 7
二　個に憑いた幻想と言葉 24
三　個から異常身への変貌と言葉 46
四　異常身から個への幻想と言葉 62
『春雨物語』とその周辺 91
序説『春雨物語』 93
——言葉から沈黙へ——
血かたびら 109
天津処女 129
海賊 148
二世の縁—入定秘儀の空白化— 165
目ひとつの神 182
「ますらを物語」の成立 198
『西山物語』と「死首のゑがほ」 211
捨石丸 231

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宮木が塚　251
樊噲　267
『胆大小心録』の世界　297
——上田秋成の晩年——
一　二つの顔　299
二　知己と異人　302
三　脱神秘化　308
四　奇異の体験　314
五　色好みについて　318
六　公儀批判　322
七　庶民への共感——遊び　328
あとがき　337

幻妖の文学『雨月物語』

――言葉との出会い――

一　天皇怨霊の憤怒と言葉

『雨月物語』が非公許出版であったという衝撃的な事実を、従来とくに問題にしたことはなかったが、ようやくこの事実に着目して問題にしはじめたのは、秋成研究に画期的な足跡を印した高田衛である。[1] 今、氏の記述に触れて『雨月物語』の成立をめぐる問題を概観し、のちにわたしの考えを述べてみようと思う。

『雨月物語』が剪枝畸人の序があることは知られているが、上田秋成の署名ではなかった。秋成は生涯の間、『雨月物語』の著者が自分であることを公開したことはなかった。しかも、秋成個人にとどまらず、その周囲・書肆までが不思議なほど、この緘黙に協力的であったことを、高田衛が指摘している。『雨月物語』が秋成によって書かれたものであることがはっきりしたのは、没後に出た第四版（天保年間と推定）の表紙見返しに「上田秋成大人編輯」と明記され、曲亭馬琴や木村黙老によって秋成作であることが公開されてからである。これを高田衛は、この物語が非公許出版であることに関っているのではないかと、問題を提起している。『雨月物語』は初版はもとより、再版・三版時にも版行出版の届けのない無届け出版であったのだ。

もう一つの不思議は『雨月物語』の刊行が安永五年なのに、自序には「明和戊子（注、五年）の晩春（注、三月）、雨は霽れて月は朦朧の夜、窓下に編成」と脱稿年次を明和五年と明記していることである。この間には八年のずれがある。当時の出版事情を考えると、この八年のずれは普通のことで、とりたてて問題ではないかもしれない。そこでどうしてこういう事態が生じたかを考察するために、明和五年以前に溯って、『雨月物語』成立に関する年次にあたってみたい。『雨月物語』以前にあって、『雨月物語』の端緒を彷彿させるのは、明和四年正月刊行の『世間妾形気』（作者和氏譯太郎、のちの秋成）の巻末に、同じ著者による『世間猿後編諸国廻船便』『西行はなし歌枕染風呂敷』二作の近刊予告である。題名から考えて、この二作が浮世草子作品であることは疑えないが、そこに『西行はなし歌枕染風呂敷』があることが注目される。これが『雨月物語』の「白峯」にまで成長していったことが考えられる。いや「白峯」だけではなくて、九篇の作品が

『西行はなし歌枕染風呂敷』の中に収めようとして、資料を蒐集した諸国咄的な各篇であったかもしれないということが、想定されてくる。

秋成の西行への関心は、明和二、三年頃から始まっている。多分この頃だと思われるが、秋成は大和・吉野金峯山登山行に出発している。これも西行の故地をめぐる旅であった。明和三年に刊行した『諸道聴耳世間猿』巻四の一には、『撰集抄』などで伝承された西行の伝統につながろうとして、吉野の奥に引き籠り、「屎ふむやあまりに奥の山ざくら」などという句（句は秋成の句ではない）を詠む風流の偏執狂めいた男を書いている。これも吉野山へ旅をした自己の戯画化であったのだろう。

こうして秋成は『撰集抄』に出会い、さらに伴山という一宿道人が諸国を旅して聞書したという形式をもつ西鶴の『懐硯』などからも示唆を与えられたかもしれない。とにかく西行の一代記に関心をもち、『撰集抄』の外に当時流行していた西行関係の俗書をも参看したであろう。最近の研究によれば、「白峯」創作に当時の霊場案内といった通俗書、通俗史書との出会いが影響を与えたのではないかと言われている。[2] そうした準備過程において、諸国を旅をする西行の聞書が、材料の関係で浮世草子の文体では盛り切れるものではないと知ったであろう。とくに「白峯」の材料である『保元物語』『撰集抄』「松山天狗」などとの出会いによって、文体の変革を迫られたであろう。したがって明和四年正月の広告時には、近刊するほど完成されていたのではなく、まだ執筆中の草稿の段階であったのだろう。

そうした文体上の変革が、一応定着をみたのが明和五年三月であったのであろう。秋成が明和五年三月と明記したことについて、高田衛は綾足に対する対抗意識を提起している。秋成が深く綾足の存在にこだわり続けたことは事実である。しかも、明和五年の二月には綾足の『西山物語』が刊行された。これが和文体の読本としては、近世初期のものを除けば初めてのものである。『西山物語』とは違った読本体のものを自分も確立したのだということを示さんがために、それより一ヶ月あとの明和五年晩春の署名をしたのではないかということは充分考えられることである。高田説はその証拠として『雨月物語』の最終章の「貧福論」が『西山物語』の金銭観・貧富観に対する半ば公然たる批判の意図をもっていたことをあげている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

明和五年の署名を以上のように考えるとしても、その刊行がなぜ八年後でなければならなかったかという問題が残る。むしろ、この問題の方が重要なのである。この八年の歳月を秋成の推敲過程と考えるにしても、あまりに長い。それとは別次元の問題が伏在していたのではないかと当然考えられてくる。それを高田衛は同じく「貧福論」の記述に求めている。「貧福論」が「堯蓂日杲、百姓帰レ家」の語をもって結ばれていることは周知のことである。これは従来来るべき徳川の世を謳歌慶祝する未来記的発想の言葉であると解されてきた。高田衛もそれを否定しているのではないがただこの未来記発想の中に、徳川政道への批評を内包する両刃の剣的な危険性をもつのではないかという。とくに「百姓帰レ家」の詩句に似ている「国家安康」の鐘銘が、大坂冬の陣のきっかけとなったことを連想させるという。しかも、「貧福論」が作者の意図を超えて、徳川政権の成立を、貨幣集積論の見地から述べるという、作者の庶民身分にしては僭上にすぎる文章になったことを指摘している。こうして「貧福論」は巻頭の政治的敗北者の怨念の章「白峯」と、イメージ的に重層・連絡してしまう可能性があったと、結論づけている。

ここに『雨月物語』出版遅延・非公許出版ということについての新しい問題が提起されたわけである。おそらく、こうした問題は、巻頭・巻末の篇だけでなく、巻中におかれた「仏法僧」「吉備津の釜」「青頭巾」にも、多かれ少なかれ介在したと思う。「仏法僧」は高野山での禁忌である秀次の亡霊を出現させた作品だし、「吉備津の釜」は吉備津の神主の女子が、御釜祓の占いに背いて結婚し、捨てられて復讐の鬼と化した話だし、「青頭巾」は開山快庵禅師の事跡を書いたとは言え、真言密教寺時代の人肉食を描いた作品であった。これらは社寺や神社の教権に触れるものだった。当時の社寺や神社の教権がいかに頑迷なものであったかは、快庵禅師ら高僧の伝を含む『日本洞上聯燈録』が延享三年、関八州・東北の曹洞一宗の宗権を司った三刹（総寧寺・大中寺・龍穏寺）の圧制によって絶版を命じられ、木版を焼却された（一本だけ或る寺に残っていて明治十八年の活字版に役立った）ことをもっても、明らかである（横関了胤『江戸時代洞門政要』東洋書院）。これは享保七年の幕府の出した図書出版条令に基づく圧制であった。その理由は具体的にはわからぬが、法脈の紛乱が理由かもしれない。

わたしは高田説を発展させるために、「貧福論」と首尾円環する、巻頭におかれた「白峯」の方を重視したいのである。

「白峯」がどのような衝撃力をもつか考えるためには、宝暦十三年に行われた崇徳院六百年祭に注目しなければならない。『近松の天皇劇』にも書いたことだが、徳川幕府の崇徳院の白峰山陵や白峯寺に対する態度には、並々ならぬものがあった。高松十二万石に封ぜられた松平頼重（水戸光圀の実兄）は、元禄六年、白峰寺に寺領を寄せ、大々的に修理保護に努めた。延宝八年、松平頼常が白峰山陵を修めて其廟を営み、祭田を寄進した。宝暦十三年には藩主松平頼恭によって、六百年祭がいとなまれた。[3] この六百年祭は元禄時代からの白峯山陵の保護の総仕上げ的な意味をもっていたのではないかと思われる。これらが幕府の容認の下で行われたことは言うまでもない。

高松藩や幕府がなぜこのように白峯山陵を祭ったか。それは天皇御霊として最も怖るべき崇徳上皇の御霊を畏怖し、それを祭らなければ御霊の発動する可能性があったからである。文久三年、将軍家茂の時代、十一代藩主松平頼聡によって七百年祭が執行され、それは慶応四年、朝廷が崇徳上皇の神霊の還御を乞うまで続くのである。幕府政治の安泰のためには御霊の祟りがあってはならないのである。こうした畏怖感は幕府ばかりでなく、幕府にとって変ろうとする朝廷の側にもあったことを、谷川健一が「崇徳上皇」の中で論じている。[4] 言い換えれば、崇徳院のたけだけしい御霊の発動が、六百年も七百年も続くと考えられたのである。

これは御霊の歴史を知らなければ、肯定できないことかもしれない。また為政者の政治的心性にかかわってくることなので、単純に結論を出せない問題でもある。今この問題に深入りはできないが、ともかくこうした状況のもとに、「白峯」を巻頭に据えたこの物語集の刊行は不可能だったのではないか。『雨月物語』が脱稿され序が書かれた明和五年は、崇徳院六百年祭の行われた宝暦十三年から、わずか五年後である。それなのに「白峯」は、幕府のもっとも恐れている崇徳上皇の御霊の発動を、歴史の上で実証したにひとしいものとなったのである。わたしは近松の天皇劇が、幕府の権力をもってしても無化できなかった天皇霊を、舞台上に招魂するにひとしいものであることを指摘したが、それよりももっと強力に御霊の発動を描いた「白峯」は、読む者をしてまざまざと御霊の跳梁の激しさを、実感させるものである。それは政治的敗北者の怨念の章であるばかりでなく、祭ってもなお止まない天皇御霊の憤りの恐ろしさを示すものであった。

幕府は現実的には朝廷を利用し、朝廷もまた幕府を利用し、相互にその支配権力を強化していたことは疑えないが、長

い歴史をもつ朝廷の存在、その国家教権的な象徴を無視できなかった。それに明和二年には真淵の「国意考」（刊行はのち）が書かれ、明和四年には江戸中期の尊王論者山県大弐・藤井右門を死刑に処し、竹内式部を八丈島に流すといった時代状況がある。わたしは近世の天皇家は、政治的な権力を幕府に完全に奪われているが故に、その分だけ御霊的側面を保持していると述べたことがある。「白峯」は言わばその天皇御霊の発動を描いたものだったのである。

そのために為政者への刺激を恐れた秋成は、巻末に「貧福論」をもってきたということが考えられる。「白峯」の与える印象の恐ろしさを緩和しようとして、その代償として最後に徳川の世の治世への礼讃を、未来記的に書かざるをえなかった。「白峯」の夜の闇が明けて、「堯蓂日呆、百姓帰レ家」によって庶民の帰るべき方向を暗示したのかもしれない。そこに巻頭と巻末の首尾照応をしたつもりであったが、それが高田衛の言うように逆の危険性を孕むものだとしたら、折角の首尾照応も逆効果だったことになる。

こう考えてくると「貧福論」のさきの詩句も、当時の小説出版の習慣に従った揚句的な治世礼讃とは考えられないことになる。『西行はなし歌枕染風呂敷』を『雨月物語』に書き換えていった秋成の創作意識が、かなり屈折したものであることがわかる。それと同時に、「白峯」と「貧福論」がけっして無関係に設定されたものではないことがわかれば、当然ここに九章の短篇の連環的構成ということが問題になってくる。高田衛が強調しているように『雨月物語』は、九篇の独立した主題が円環的につながっている。これを夏目漱石の「夢十夜」に似せて、夢九夜の物語と考えることもできるし、また各篇の自立した主題の間の連環的構成をみてとるということも可能である。

わたしはかつて「書く衝動」という立場から、『雨月』の文体を退行と超越の二面に分析したことがある。[5] 退行とは妙な表現であるが、例えば「雨」は異界空間への前駆であり、内的時間の始まりであるという意味で、無意識領界（夢・幻想）への退行であるとすれば、超越とは異界空間を一瞬にして照らしだす光であり、内的時間の瞬間的切断である。これは「書く衝動」の一面を切りとったという意味ではあたっているが、この二面をもって『雨月』全体をわり切ることはできない。それに退行と超越は、「書く」主体の側に引き寄せて裁断したきらいがあり、この表現を使うにしても、もっと言葉との出会いという創作行為に即して考える必要がある。

『雨月物語』の文体が成立するためには、国学や古典との出会いが必須であり、さらに『剪燈新話』系の中国文語小説の影響がなければならなかった。かつてわたしはそれを「ヨミ」の様式の成立として考えたことがある。[6] こうした文学史的考察がより精密化されることも必要であるが、ここではそこまでは立入らずに、あるがままの『雨月』という作品における言葉との出会いを考えてゆきたい。その場合に従来の典拠研究が主として古典に溯源するという方法をとっていたのに対して、最近の新しい層の研究者の間には、同時代性を重視する傾向が顕著にみえてきたので、この点についてのわたしの考えを述べてみたい。

典拠で言えば通俗史書とか霊場案内のような通俗書との出会いが発見され、言葉で言えば、『書言故事大全』『世話焼草』『たとへづくし』『諺草』のような近世の俚諺集から、『雨月』の用語が発見されるということは、[7] 従来の古典への溯源を修正するものである。しかし、この場合も同時代性への還元になってはならないと思う。ここには異＝言語化が行われているのであって、言葉や趣向が同時代のものを使ったとして、それは作品行為によって別な秩序のなかへ組織づけられるのである。言葉や趣向に同時代性がありながら、作品としては異質の『雨月物語』が成立しているのである。

例えば「白峯」の細部にわたって、その言葉や趣向を典拠に還元することはできるであろう。しかし、多くの典拠を集合させても、当然そこから「白峯」は生まれず、秋成の言語化の行為を待たねばならない。典拠論をするならば、言葉の同時代性への還元ではなく、同時代性からの異＝言語化の方向に向わなければならない。言葉は言葉自身を異化したり超越するのである。「白峯」はおそらく『雨月物語』の最初の創作であったであろうから、他の篇にくらべて多くの材料を集め、その言語化の過程でも、現代の作家が多様な材料から何かの手がかりを摑み、その端緒を拡大することで言語化するのとは違って、典拠として選んだ素材から言葉を選びだすようにして言語化していったに違いない。それをかりに同時代性への退行と考えれば、その退行には必ず超越、異＝言語化が伴わなければならなかったのである。

秋成の創作行為にはさまざまな準備過程があったであろう。まず典拠となる素材を集めること。その素材から言葉の荒筋を選びだして、組立ててみること。その過程でおのずと素材となった同時代性言語からの異＝言語化、超越が生まれ、新しい秩序のもとでの表現となったであろう。この素材と異＝言語化の両側面を押さえていれば、『雨月』の言葉を典拠

となったと想定される素材に還元してみることも、初歩的な段階としては有効であろう。ただその場合は、素材に還元できない空白部分が残るであろう。こちらの方を重視しなければならない。素材からみればそれは空白部分であるけれど、実はその部分こそ秋成がみずからの言語化の過程で創りだしたものであるからである。この創りだした部分を中心におかなければ、それは表現論にはならない。こういう全過程を透視する行為こそ、意識的な表現論となるであろう。

なお、言葉の選択をいうならば、他方に言葉の切り捨てという言語化に注意を向けなければならない。あとで触れるように、「白峯」からは「天狗」という言葉は切り捨てられ、その行為や発現のみが採用されている。秋成は『世間猿』巻五の二「祈禱はなでこむ天狗の羽帚」で天狗を登場させて以後、どういうわけか天狗の語を避けている。それは『春雨物語』の「樊噲」「目ひとつの神」でも同様である（後述）。『雨月』や『春雨』のさまざまな材料を包含している『胆大小心録』にも不思議にも「天狗」への言及がない。これは「天狗」という言葉を切り捨てたと考える外はない。

言葉の次元だけでなく形象の問題にまで入れば、「海賊」のモデルになったとされている文室秋津の「酔泣之癖」を切り捨て、「酒のみだれ」に変更している。これは異＝言語化の問題を超えて、異＝形象化にまで入るであろう。従来の典拠論は、言葉の選択に中心がおかれ、他の反面の言葉の切り捨てや異＝言語化までには及ばない。言葉の選択はこうした切り捨て（不採用）や異＝言語化と一体となって、「書く」行為が進行するのである。言葉の選択は言葉の顕在化であるから文章に残るが、一度作者の思考の表層に浮びあがったけれど、それを顕在化することなく捨てられたり異＝言語化されて、どれだけの言葉が深層の底に埋められていったか知れない。異＝言語化とはこうした重層のもとに行われるのである。

これをもっとも単純な例からみてみよう。「白峯」の書きだしが、『撰集抄』巻二「花林院永玄僧正事」（続群書類従本による）を踏まえたものであることは、従来も指摘されているが、典拠に「会坂の関の関守留め兼ねし」とあるのが、「白峯」では「あふ坂の関守にゆるされてより」となる。「秋こし山の薄紅花見過しがたく」が「怀こし山の黄葉見過しがたく」となる。これらには大きな変更はない。しかし、これは類似な箇所をあげたにすぎないのであって、実はこの箇所にも、言葉の省略や変更の外に、文章の切り捨てや組み変えが行われているのである。例えば典拠の「越の白山雪積て」以下、続群書類従本で五行分が切り捨てられ、文章上の位置の変更によって、組み変えられている。詳細は省くが、このよ

うに言語化という創作行為は、『撰集抄』の文章を一度解体して、あらたな秩序のもとに再組織することであった。言葉との出会いは、言葉の異＝言語化によって、典拠から異質化してゆくのである。

これは言うまでもなく当然なことなのだが、この当然のことが無視されているきらいがあるので、もう少し続けてみよう。「花林院永玄僧正事」は西行が主格ではない。しかも、その一文は実際に歩いた道行ではなくて、想像された道行である。越の白山に始まり、老蘇の森（近江）をへて、佐野の野原（上野・下野・信濃の説あり）、木曽のかけ橋、佐野の舟橋（佐野の野原と重複）までは不可能なコースではないが、再び会坂の関に戻り、鳴見潟（尾張）、富士の山辺というふうに、まったく地理的な関連もなくたどる道行なのである。歌枕を並べたにすぎないこのコースを、「白峯」は西行の旅らしく逢坂にはじまり、東海道を下って、みちのくから象潟に出て、木曽を通るコースに変更したのである。そして、「猶西の国の哥枕見まほしとて、仁安三年の秋」と年号を入れて、難波をへて須磨明石を通って、讃岐の真尾坂にいたる旅へと延長している。この旅の折り目に「仁安三年の秋」という年号を突如として挿入したことは、『撰集抄』などにはみられない新鮮な文脈を作りだしている。

『撰集抄』にも年号が入っていないわけではない。しかし、それは「天暦の御代天徳四年長月の末の比、左衛門尉の陣より火出きて」（第九）というふうに、事件の起点を示す時間の指定なのである。「白峯」の冒頭は、旅をする道行の主格は指定されておらず、誰かわからないことになっているが、「仁安三年の秋」「讃岐の真尾坂」などによって、それが漸次西行らしいことが暗示されてくるのである。

西行が讃岐の真尾坂にしばらく杖をとどめる条は、『撰集抄』巻一「新院ノ御墓讃州白峯ニ有レ之事」によっていることは周知の通りである。ところが『撰集抄』ではこの真尾坂の庵の状況を、続群書類従本で約八行にもわたって描写している。しかも、それは「猿ノ声を聞に、そゞろにはらわたをたち侍り」といった古典的な描写法である。これを秋成は全部切り捨てて、ただ「草枕はるけき旅路の勞（いたはり）にもあらで、観念修行の便（たより）せし庵（いほり）なりけり」と簡略化している。秋成がどこを簡略化し、どこを脹らませて詳細に描くかは、次の白峯に登るところになって、はじめて明らかになる。

『撰集抄』では「新院の御墓所を拝奉らんとて」から、「是ならん御墓にや」まで二行程度の描写しかない。墓の位置

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com